

桜蔭俳話会 十一月句会 (第三二〇回)

平成二十五年十一月二十三日 (土) こども自然公園・及び畠山地蔵尊

【鑑賞】

返り花今日一日を宝とす 清子

初めて句仲間と吟行に出掛けることができた作者の喜びが溢れた一句である。作者から「今日一日が宝」と言って貰えることは、同行者にとっても嬉しい限りである。天候にも恵まれ、楽しい紅葉狩りの吟行会でした。

【鑑賞】

老いの輪の笑ひ高々返り花 友子

躑躅の垣の手前の芝生ではブルーのレジャーシートを敷いて、年配の男性諸氏が紅葉狩と称して酒盛の準備を準備していた。その笑い声は、定年後の自由な生活を謳歌するように屈託無く、精神的に突き抜けたものであった。常日頃は、酔客ないし酔客予備軍の大声にはへきへきさせられるが、そのグループの輪にはそれがなく、むしろ爽快さを感じた。

【鑑賞】

冬の蜂集合住宅古びをり ヤエ子

蜂と集合住宅の取合せが良い。卵が成虫となるまでの居住空間である蜂の巣は、まさに集合住宅である。重忠公の史跡に向かう途中で見掛けた集合住宅は、耐用期間の終期に

あるかと思われるほど古ぼけたものであった。しかし、その集合住宅は、完成当時は最新の設備機器を備え、当選者は皆の羨望の中を入居したのであろう。その後子が生まれ、その子がそこで成長し、進学や結婚を機に出て行ったのであろう。「冬の蜂」と「住宅古び」を並置することによって、人智では抗い難い時間の流れを考えさせられる。

【鑑賞】

幾度の紅葉且つ散る重忠碑 秀一

幾たびも盛衰を繰り返し、ついに悲運の最後を遂げた武将の石碑を前にするとき、「幾度の紅葉且つ散る」のフレーズはすっと心に沁みて来る。

【自解】

裸木や街の骨格見えて来し 守

街路樹や大きな庭木が枯葉を落として行くにつれて街路の輪郭が見えて来る。その住宅地の当初の造成計画図に示されたのに近い骨格が浮き出て来る。

【鑑賞】

ジャングルジム攀じ上る子の軽き咳 明美

子供は風の子である。少しの風邪くらいでは家にじっとしてはおらず、外を駆け回っている。眼前のジャングルジムによじ登っているその子も、軽い風邪をひいているようである。

【鑑賞】

水田の鳥の声聴く案山子かな 邦子

稲の成長を見守って来た案山子は、稲刈を待つだけの水田に立ち、鳥の声を聴いている。その水田は稲刈を既に終わった水田かも知れない。何れにしても、役目を全うした案山子の安堵感が感じられる。その声の主の鳥は、大事な稲穂を狙い続けた稲雀かも知れない。収穫が済んでしまえば、それまでの攻防は跡形もなく消える。

【鑑賞】

自然薯のこんがらかつて黄葉す ツル子

自然薯の蔓がこんがらかつて黄葉している情景を切り取ったものである。観察の行き届いた句であり、表現も端的である。

【鑑賞】

冬日和池を背にして立ちにけり 真三

普通、池を眼前にすれば、池の中の情景を詠もうとするのであるが、この句の作者は池を背にして立ったとのことである。池の中の情景より素晴らしい情景が背後にあることに気付いたのであろうか。それとも振り向いて立ちつくすような出来事が起きたのであろうか。いろいろと読者に想像させる点で巧い俳句である。